

聖書：コリント人への手紙第一 14：1～12

説教題：求めるべき賜物

日時：2022年12月11日（朝拝）

パウロは愛の章（I コリント 13 章）の話を終えて、14 章 1 節で元の話に戻ります。パウロは 12 章で御霊の賜物についての話をしていました。その最後の節の 12 章 31 節で「あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい」と言いました。私たちはそこを読んで、ではその「よりすぐれた賜物」とは何だろうかと思います。パウロはその話へと進む前に I コリント 13 章のメッセージを語ったのでした。賜物について考えることは大切であるが、それよりももっと大切なこと、もっと根本的なことがあると。そして 13 章で愛の絶対必要性について語りました。どんなに優れた賜物を持っていても愛がなければ無に等しいと。賜物は愛という道を進むこととセットで考えられなければならないと。その話を終えて、彼は今日の 14 章 1 節で元の話に帰って来たわけです。まず「愛を追い求めなさい」と言って今一度、愛の重要性について確認した後、1 節後半でこう言います。「また、御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい。」この「熱心に求めなさい」という言葉は 12 章 31 節の「熱心に求めなさい」という言葉と原文のギリシャ語でも同じです。そしてこの二つの節を読み比べて分かることは、12 章 31 節で「よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい」とパウロが述べた時に言おうとしていたのは、14 章 1 節にある通り、特に預言することだったのだということです。

さてパウロはここで「特に預言することを求めなさい」と言いますが、これは御霊の賜物の中で「預言」が最もすぐれているということなののでしょうか。先に結論を言えば、そういう意味ではないと思います。この後、異言と預言が対比して述べられます。なぜそうであるかと言えば、コリント教会では異言が過度に注目され、持ち上げられていたからです。異言と預言には似ているところがあります。どちらも口から出す言葉です。またその語る内容はどちらも神と関係しています。しかしコリント人たちは圧倒的に異言の方を高く評価していました。異言を話す人の方が強烈な印象を与えます。異言を話す人の方がはるかに霊的な人であると彼らは考え、この賜物を熱心に求めていました。パウロはここにある誤った態度を正すために異言と預言を比較し、預言がまさるといふ話をしようとしています。ですからこれは預言がすべての賜物のトップに来るといふ話をしようとしているものではないのです。あくまで異言との比

較において預言の方がすぐれていると言わんとするものです。そしてこれによって他の事柄にも適用できる大切な原則、大切な考え方を示そうとしているのです。

では異言と預言の比較に関するパウロの言葉を見て行きます。2 節に異言で語る人は「人に向かって語るのではなく、神に向かって語ります」とあります。異言が話す相手は神です。神に向かって語るものですから、これは祈りとか賛美の形を取ったのでしょう。またこの異言について「誰も理解できませんが」とあります。それは周りの人たちが理解できないものであり、話している本人もそうだったのかもしれませんが。この異言はかなり独特な賜物だったと考えられます。ちなみにパウロの手紙で異言について触れられているのは、このコリント書だけです。コリント書はパウロの手紙の中では初期に書かれたものですが、その後に書かれた多くの彼の手紙には一切出て来ません。使徒の働きでは2か所、カイサリアとエペソで聖霊がくださった時、そのしるしとしてそこにいた人々が異言を語ったという記述がありますが、それ以外は新約聖書全体でも、このコリント書にしか出て来ないのです。そういう意味ではこれは普遍的な賜物であるよりは特殊な賜物、そして特にコリントで顕著に見られたものだったと思われまます。しかしその一方、これが御霊に由来するものであったことは、聖書がそう述べていますから、そのように受け止める必要があります。2 節後半にも「御霊によって奥義を語るのです」とあります。ここの「奥義」は、聖書の他の箇所に出て来る「奥義」の意味とは異なって、先に言われた「だれも理解できない」を受けて、人間には知り得ないこと、理解できないことを指すと考えられます。

では一方の預言はどうでしょうか。3 節に、預言する人は「人に向かって話す」と言われています。異言は人ではなく、神に向かって語るものであるのに対し、預言は人に向かって話します。ですから人間に理解できる言葉でなされます。そしてそれは「人を育てることばや勧めや慰め」を話すとあります。預言とは神の言葉を預かって語ることです。神が私たちに語ろうとされること、そのエッセンスは一言で言えばキリストの福音と言えます。神からのラブレターである聖書全体のテーマも、一言で言えばキリストです。ですからキリストを語る預言は確かに人を育てます。これは「家を建てる」という意味の言葉で、その人を建て上げる、成長させるという意味になります。「勧め」と訳されている言葉は「励ます」という意味の言葉です。キリストの福音は確かに人を励まします。またその後にあるように慰めをもたらします。このように異言と預言には大きな違いがあります。4 節にある通り、異言で語る人は自らを成

長させるのに対し、預言する人は教会を成長させます。

この観点からパウロは5節で、異言よりも預言がまさると言います。5節の初めに「私は、あなたがたがみな異言で語ることを願いますが」とある通り、異言そのものは悪ではありません。後に18節で述べられますが、パウロも異言を語ることができました。その祝福を彼は体験を通して知っています。御霊の良い祝福にはみながあずかるようになることをパウロは願っています。にもかかわらず、「それ以上に願うのは、あなたがたが預言することです」と言います。なぜかと言えば、その方が教会の成長に役立つからと彼は言います。ここに示されている問いは、自分の成長を願うことと、教会の成長を願うことでは、どちらを優先して考えるべきかということです。そしてここに示されている答えは、教会の益を優先して考えるべきであるということです。ここで効いて来るのは先週まで読んだ愛の章、13章です。13章5節に愛の特性として「自分の利益を求めず」とありました。この何よりも大切な愛の道を進むなら、ただ自分を成長させるだけの異言よりも、皆の益、教会の益に役立つ預言を、よりまさるものとして優先的に願い求めるべきであることとなります。周りの人々に理解できない言葉を発して、一人で悦に入り、恵まれた状態になることよりも、周りの方々が建て上げられ、励まされ、慰めを受ける言葉を語る者となることを優先して求めるべきであると。異言も解き明かされれば話は別です。その意味が明らかにされるなら、それは預言と似たものになります。しかしそうでないなら、預言する人の方がまさるとパウロは言うのです。

解き明かされない異言が何の役にも立たないことについて、6節以降に色々な例が述べられています。まず6節はパウロがコリント教会を訪問する場合のことです。先にも触れた通り、パウロは異言を語ることができました。その彼がコリントを訪ねて異言だけを話すこともできます。しかしそれでは一体何の益になるのでしょうか。せっかくパウロが来てくれたのに、何を話しているのかコリント人たちは何も知ることができません。6節の「啓示、知識、預言、教え」はいずれも通常の言葉によってなされるものです。これらによって語られれば彼らは益を受けるでしょう。しかしただ異言を話すだけなら、コリント人はフラストレーションを感じるだけで何の益も受けないこととなります。

7～8節は楽器のたとえです。笛や豎琴はいのちのない楽器です。人間とは違います。

しかしそんな楽器も同じことです。それは色々なメロディー、意味ある音を出してこそ人々に伝わり、インパクトを与えます。しかし意味の伝わらない音をただ出しているのでは何を吹いているのか、何を弾いているのかさっぱり分かりません。8 節のラッパも然りです。ラッパはここでは戦いの合図を出す楽器として考えられています。しかしその音ははっきりしなければ何の合図なのか人々は理解できません。従って誰も戦いの準備をすることにはなりません。

9 節は舌で明瞭な言葉を語らない場合のことです。モゴモゴ、ブツブツ話していたら誰にも分かってもらえません。それは空気に向かって話しているようなものです。解き明かしなしの異言も同じである！とパウロは言っているわけです。

そして 10～11 節では外国語にたとえられています。世界にある多くの言葉にはみな意味があるはずですが、その言葉の意味が分からなければ話す人たちは互いに外国人同士、言葉が通じないため親しく交流できない者たちとなってしまいます。本来、教会は神の家族の集まりであり、集まった者たちが最も安らぐ場所であるはずですが、理解できない言葉でやり取りする結果、互いの関係に溝が生じ、かえって分裂や分断が生まれる場所となってしまいます。

ですからパウロは 12 節で同じポイントを再度強調します。コリント人たちは御霊の賜物を熱心に求めていました。それ自体は良いことです。しかしそれを「教会を成長させるために」という目的の下で求めなさいと言います。自分一人の祝福、自分一人の成長、自分一人の栄光のため賜物を求めるのではなく、むしろ他者の祝福、教会の祝福、信仰共同体全体の益と成長を願って、御霊の賜物が豊かに与えられるように求めなさいと言っているのです。

私たちは今日の御言葉の光の下で自分を振り返ってどうでしょうか。私たちもそれぞれ自分に与えられている賜物や特性はこれだろう、と人前で言うことは難しくても、主の前で考えて思うところはあると思います。しかし今日の御言葉から問われることは、果たして私の賜物は他者の助けに実際になっているだろうかということです。賜物は単に自分の祝福、自分の楽しみ、自分の名誉のために与えられたものではありません。それは教会の成長と祝福のために活用するようにと与えられています。この神の御心をもう一度受け止めて、私たちは自分に与えられている賜物を正しく用いるようにと

導かれる必要があるのではないのでしょうか。そしてすでに与えられている賜物ばかりでなく、さらに賜物が豊かに与えられるように求めよとされています。心にかけるべきは教会の祝福、兄弟姉妹一人一人の益です。自分の自己実現のためではなく、自分一人の成長のためではなく、他者に仕えるために、教会共同体がさらなる祝福に生きるために、御霊の賜物が豊かに与えられるように求めなさいとされています。

これは常に自分中心に生きてしまいがちな私たちにとってあまりにも難しい課題、あまりにも現実からかけ離れている課題のように思われるかもしれません。そんな私たちにもしこのような生き方ができるとすれば、それはやはり I コリント 13 章の道を通ることによってではないのでしょうか。それはまた言い換えれば、まずその道を私たちより先に歩まれたキリストのお姿を仰ぎ見、そのお姿が深く私の心に迫って来ることによってではないのでしょうか。キリストはご自分のためではなく、まさに他者の益を優先して、私たちの救いのため、この世に人として誕生し、やがて十字架へと至る献身の生涯を歩んでくださいました。そこにあったのは「自分の利益を求めず」という生き方そのものでした。さらに遡れば、その愛は父なる神が私たちのような者を心にかけて、ご自身の大切な一人子さえも惜しまずにこの世に遣わしてくださったことに示されています。この神とキリストのお姿が私たちの心に迫って来る時、それが何らかの意味を持つ時、私たちは心から感謝して、そのお姿に倣う歩みへと、すなわち皆の益のため、教会の成長のために自らをささげる歩みへと導かれるのではないのでしょうか。

コリント人たちは異言を話す者になることによって霊的な人間になろうとしました。人より高い地位に上って神と特別に近い関係にある者になろうとしました。しかし神は私たちのために下って来てくださったお方です。もし私たちが神に近い人間、神と親しく交わる霊的な人間になりたいなら、神に倣って自らを遜らせ、他者に仕えて歩む者となることを求めなければなりません。十字架の死にまで進まれたキリストに倣う歩みをするところにこそ、真の神との交わりと豊かな神体験、霊的な人となる道があるということなのです。

このアドベントの時、神とキリストのお姿を良く見つめて、自分に与えられている賜物を、自分のためにではなく、他者のため、教会のために用いることへと促され、導かれる者でありたいと思います。そして今あるものに加えてさらに教会の成長のた

めに御霊の賜物が与えられることを熱心に求めよとされています。この勧めに従ってさらなる導きを祈り求め、神とキリストに倣う真に幸いな道を進む者とされて行きたいと思います。